様式 5:終了時活動報告書

2024年12月8日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業
終了時活動報告書・ニュースレター用報告書（2023 年度採択案件）

１．業務の概要	
（１）案件名	兵庫県三田市における外国人防災リーダー養成を通じた防災活動推進事業
（２）実施団体名	三田市国際交流協会
（３）実施期間	2023 年 11 月 9 日　～　2024 年 11 月 8 日
（４）実施国	日本
（５）活動地域	兵庫県三田市

（６）活動概要

①活動の背景：

外国人防災において、以下のような課題に対応するため、本活動を実施することとした。

１．「ストック情報」の不足：　日本人が幼少時からの訓練や教育により蓄積された災害のリスクの認識、避難所へ行くという認識が不足している。外国人のための防災訓練を実施しているが、関心のない人の参加は難しい。また、出身地や居住地、言語が多様であるため、外国人どうしの情報交換があまり行われていない。

２．災害対策基本法に示されている「要配慮者[*1]」と「避難行動要支援者[*2]」である外国人への体制整備が不十分：　この制度に該当するのは日本語が十分に理解できない外国人であるが、制度について多言語で周知するものがなく、制度を知ることができず活用できない。

[*1]「要配慮者」: 言葉の壁や文化や習慣、宗教上の配慮など、避難生活での情報やサービスの提供での配慮

[*2]「避難行動要支援者」: 日本語の理解が不十分なため「危険情報」が届かない、災害や避難に関する知識が不十分で地理にも不案内などの理由で適切な避難行動がとれない人への避難支援

３．外国人への不理解や誤解による排除や差別（外国人は怖いなどの不理解、不安を抑えるために大声で騒ぐなどの避難所での行動を不理解な外国人に対する誤解）がある。

４．地域住民とのつながりが希薄、外国人どうしのつながりも薄い。

②活動の目標：

１）外国人防災リーダーを養成し、在住外国人の自主防災体制を整備する。達成度：80%

２）外国人防災リーダーを核とした防災啓発活動を行い、地域在住外国人の防災意識を高め、日頃の備えに役立てる。達成度：60%

３）上記活動を通じ、外国人相互のネットワークや地域住民とのつながりを深め、災害時の連携に役立てる。達成度：50%

２．業務実施結果

（１）実施した内容

１）仙台視察　2023 年 11 月 23 日～25 日

目的：外国人防災活動の企画・実施に当たり、外国人防災活動の先行地域である仙台市の関連団体の活動内容と実施状況、課題等を知るため。また、東日本大震災の被災地を訪問し、災害被害の具体例とその後の復興の様子を知るため。

視察参加者：中村恵美・寿賀素子（三田市国際交流協会）、日比野純一（エフエムわいわい）、中村朱里（PHD 協会）

視察先：①(公財)仙台観光国際協会　須藤伸子氏、五十嵐丈士氏、菊池哲佳氏他
②(公財) 宮城県国際化協会　大泉貴広氏、伊藤友啓氏
③JICA 東北　佐藤智子氏、秦英進氏（オンライン）
④仙台 3.11 メモリアル交流館、震災遺構仙台市荒浜小学校

内容：①外国人防災リーダー育成講座の説明、災害時の支援体制、防災 WS・NICE プログラムなど
②防災研修、企業と地域のつながりや社協との連携や課題、県内各地での取り組みなど
③技能実習生と高校生とまち協の協力での防災訓練、異文化交流の取り組みなど
④見学、語り部の話

２）外国人防災リーダー養成講座　2024 年 2 月 4 日、11 日

目的：市内在住の外国人を対象に、防災に関する情報を発信できる外国人防災リーダーを養成するため。また、防災の知識やリーダーとしての役割を確認するとともに、地域の防災団体との連携を進め、外国人防災リーダーのネットワークづくりを促進するため。

参加者：一般 8 名（ベトナム 2 名，台湾 2 名，フィリピン 1 名，フランス 1 名，日本 2 名）協会ボランティア通訳（外国語）および市ボランティア通訳（手話）8 名（英 2 名，中 1 名，ベトナム 2 名，手話 3 名）、スタッフ 6 名
コーディネーター：日比野純一氏　協力：さんだ防災リーダーの会

実施場所：三田市まちづくり協働センター
①講演：コミュニュティ防災(日本の災害、阪神淡路大震災)　日比野純一氏
②講演：地震への備え。そのとき私たちができること。 楊梓氏(元・人と防災未来センター)
③災害食調理（ポリ袋調理でのカレーライス、ポテトスナックのサラダ、蒸しパン）
④心肺蘇生（胸骨圧迫・AED）体験　さんだ防災リーダーの会
⑤楽しい防災　ゲーム・防災工作（段ボールスツール）　室崎友輔氏（NPO 法人プラス・アーツ）
⑥市販の防災食 食べ比べ　15 種（トマトリゾット、ガーリックリゾット、Pancan、チョコデニッシュ、サーモンチーズリゾット、コーンピラフ、ホワイトシチューリゾット、メープルデニッシュ、カレーピラフ、キノコご飯、松茸ご飯、たけのこごはん、五目ご飯、山菜ごはん、わかめご飯）
⑦防災イベントの企画および振り返り　日比野純一氏

３）京都に防災体験に行こう　2024 年 6 月 16 日　下見：5 月 19 日

目的：災害の疑似体験を通じて、防災についての知見を深めるため。防災リーダー養成講座受講者においては、小グループのリーダーとしての活動を経験するため。

参加者：一般 13 名（フィリピン 4 名，台湾 2 名，フランス 1 名，インド 1 名，日本 5 名(支援者))

協会ボランティア通訳（外国語）１名（中）、スタッフ６名　　下見：スタッフ３名
実施場所：京都市民防災センター
・地震の揺れ体験（震度 7）
・強風体験（風速 30m）
・土砂災害（大雨・映像）
・消火訓練
・建物の火災から避難（ホテル火災を想定）
・地下街水害体験（映像・水圧によってドアが開けにくくなる体験）

４）さんだ多文化防災フェスタ開催へ向けたチームづくり会議
目的：外国人防災リーダー養成講座修了生や、通訳者による防災イベントを企画するため。
４回（①6/29　②7/13　③7/27　④8/15）
実施場所：三田市まちづくり協働センター　会議室
① 6/29　参加者８名（米１名，フィリピン１名，フランス１名，台湾２名，スタッフ３名）
内容：イベントの名称、概要、役割分担
＜食＞＜救＞＜作＞をテーマとし、＜食＞では災害食の実演や試食とローリングストックの話、＜救＞では心肺蘇生、＜作＞では新聞紙を使った工作を行うことを決定した。内容と担当を決めた。食＝ポテトスナックのサラダ・ローリングストック、救＝防災クイズ・心肺蘇生、作＝新聞を使った防災工作を行うことになった。
② 7/13　参加者５名（フィリピン１名，フランス１名，スタッフ２名）
内容：具体的な内容打合せ　防災クイズは、協会所有の防災セットの備品を当てるクイズを質問シートと取り札（絵・多言語）を手作りで作成することになった。
ロゴ・チラシの検討
③ 7/27　参加者３名（米１名，スタッフ２名）
内容：進行、スケジュール
④ 8/15　参加者６名（フィリピン１名，フランス１名，台湾２名，スタッフ２名）
内容：最終打合せ

５）さんだ多文化防災フェスタ　2024 年８月 18 日
目的：イベントに参加した市民が、家族や友人とクイズや工作などを楽しみながら災害や防災について知る機会を提供するため。また、外国人防災リーダーが、参加者の興味・関心や市民として知っておいてほしい防災知識を考えてイベントの企画・実施を行い、それぞれの持つネットワークを通じて広報活動を行う経験を積むため。
実施場所：三田市まちづくり協働センター　多目的ホール
参加者：一般 11 名（フィリピン２名，中３名，日本６名（支援者３名，自治会２名，市危機管理課１名））
協会ボランティア通訳（外国語）１名（中）、外国人防災リーダー5 名，スタッフ３名，高校生ボランティア１名
アドバイザー：日比野純一氏　協力：さんだ防災リーダーの会
内容：　進行　防災リーダー（米国出身）担当
テーマ＜救＞＜食＞＜作＞
①スタンプラリー

　　Ａ.クイズ（防災グッズのカルタ）　防災リーダー（フィリピン出身）担当
　　Ｂ.工作（新聞紙で食器・スリッパ）　防災リーダー（台湾出身）担当
　　Ｃ.AED・心肺蘇生体験（さんだ防災リーダーの会）
　②防災食調理（ポテトスナックのサラダ）防災リーダー（フランス出身）担当
　　帰省先からオンラインで説明
　③ローリングストックの話（さんだ防災リーダーの会）

６）総社市視察　2024 年 10 月 16 日
目的：外国人が主導して防災リーダー活動を行っている総社市の活動内容や、メンバーにとっての魅力、活動継続のための工夫などを知り、本事業で養成した外国人防災リーダーの今後の活動を促進するため。
視察先：総社市市民生活部人権・まちづくり課　譚俊偉（タン　シュンワイ）氏　中村智也氏
参加者：外国人防災リーダー4 名，スタッフ 2 名
　①　総社市外国人防災リーダーの活動ヒアリング
　　活動の始まり、現在の活動、外国人主体で活動をすることの大切さなど
　②　三田市外国人防災リーダーからの質問・相談
　　活動を継続する工夫、メンバーにとっての魅力など

７）ふりかえりミーティング　2024 年 11 月 9 日
目的：1 年間の活動の総括として、改善すべき点や今後の活動の展望について話し合うため。
参加者：外国人防災リーダー2 人、スタッフ 4 人
・今まで外国人が主体としてイベントを企画することはなかった、今後もっと自分たちが中心となってやっていきたいという意見があった。
・次年度の防災イベントの企画アイデアも出し合い、災害時に実際に役立つサバイバル訓練のようなもの、例えば川の水を浄化して飲料水にする方法を学ぶ等の案が出た。

（２）実施成果：
１）仙台視察
・大震災を経験し防災先進地域である仙台における外国人防災リーダーの活動や宮城県・仙台市・JICA 東北、それぞれの防災への取り組みや思いを知る一方、継続の難しさや継続のための工夫を知ることができた。
・防災という一般の方が興味を持ちにくい分野で、参加者を集める工夫、継続の工夫を聞くことができた。
・仙台では東北大学と連携し留学生が関わっているため、人数は集まるが長期的な人材確保が難しいと伺った。三田市の場合は長期在住者が多いため、地域に根づいた活動者を育てることが重要だと認識した。
・災害時の社会福祉協議会や地域の各団体との連携についても知り、言語支援体制など、今後、三田市でも整備が必要だと認識した。
・被災地を実際に見学して、阪神・淡路大震災とはまた違う災害の様子を知り、災害の恐ろしさを知ることができた。災害後の取り組みについても、復興だけでなく地域ごとに災害遺構を保存し、未来に渡って記憶を残そうという意思を感じた。
・「地域の中に外国人にとっての居場所と出番があるかどうか。それが地域の人と共に作れるかどうか。外部のアクターが何らかの刺激や仕掛けをつくって働きかける必要がある。」という JICA

東北の方の話が印象的だった。

2）外国人防災リーダー養成講座
・日本の災害や防災について参加者が学ぶことができた。防災に必要な知識を得るだけではなく、災害食調理、防災グッズの作成、AED・心肺蘇生を体験できた。
・災害食調理では、災害時には水不足となるため、水を極力使用しないポリ袋調理に取り組んだ。ボイルする水の品質も飲料ほど気にならず、洗いものも減るので実用的との声が多かった。
・普段から三田市国際交流協会の活動に関わっている外国人を中心として、防災リーダーとなり得る人材（フランス、フィリピン、台湾、ベトナム、米国出身者）を発掘することができた。それぞれが防災リーダーとしての意識が高まり、また、受講生どうしのつながりも深まった。これらのメンバーで構成されたグループ＜サボテンガエル＞[三田・防災の天才が考える＝さんだ・ぼうさいのてんさいがかんがえる]が発足した。次の防災イベントの企画に向けた体制の基盤づくりができた。
・さんだ防災リーダーの会など地域の防災関連団体との連携ができた。
・地元の防災士で組織される「さんだ防災リーダーの会」に心肺蘇生やAED使用方法の指導をしてもらった。最初は外国人にどのように対応したらよいのか戸惑い気味だったが、最後には外国人にわかりやすく説明するコツをつかんでいただき、コミュニケーションをとりながら外国人と関わっていた。支援者も外国人に伝わる接し方を学ぶ良い機会になったと思う。今後も支援者に向けてやさしい日本語を含む外国人とのコミュニケーション方法の啓発も行っていく必要があると感じた。

3）京都に防災体験に行こう
・風水害や地震、火災などさまざまな災害の疑似体験をし、災害の脅威や防災の必要性を知ることができた　特に風速30mの体験は印象的だった、映像よりリアルな体験が良かったという声が多かった。
・見学の小グループのリーダーとして協会の旗をもって先導したり、点呼やとりまとめを行うなど、外国人防災リーダーグループ＜サボテンガエル＞のデビューの場となった。
・＜サボテンガエル＞メンバーや一般参加の外国人、そして日本語教室の支援者や通訳者などとのつながりができた。

4）さんだ多文化防災フェスタ開催へ向けたチームづくり会議
・サボテンガエルの構成メンバー（外国人）が主体的にさんだ多文化防災フェスタに実施をするために意見交換を行い、内容を深めていく場になった。

5）さんだ多文化防災フェスタ
・防災リーダー養成講座での企画が形となって実現した。
・地域の防災組織や地域自治会の参加もあり、外国人の活動を地域にも周知できた。
・＜サボテンガエル＞メンバーがそれぞれ得意分野で活躍した。
・地元の防災士で組織される「さんだ防災リーダーの会」も養成講座での体験を踏まえ、外国人にとって、とてもわかりやすい説明をしていただいたと思う。日本語しかできないから、ではなく、日本語とジェスチャーなどでいかに伝えるかを考えるような、外国人向け防災に関する意識の変

化が見られた。

６）総社市視察
・外国人の主体的な活動の様子を伺い、外国人による「主体的な防災への取り組み」の重要性を改めて認識できた。
・イベントを企画、実施する際に気をつけることなど、外国人目線のアドバイスをもらえた。
・総社市の外国人防災リーダーと「防災」というキーワードでつながることができた。
・外国人の立場で活動しているつもりではあったが、本当に望んでいるものが何か知り必要な協力をするということの難しさを改めて感じた。

７）ふりかえりミーティング
・この１年間を通じて外国人リーダーが感じていることを知ることができた。
・実施時期や内容など、次年度につながる様々な案が出た。

以上の活動を通じて、外国人防災リーダーの養成と、外国人防災リーダーと地域の連携体制整備という目標はおおむね達成された。今後は本事業だけにとどまらず、外国人防災リーダーによる防災啓発活動を継続していきたい。また、新規メンバーの養成なども行い、今後も引き続き外国人防災リーダーによる活動を発展させていきたい。

（３）得られた教訓など：
・外国人が主体的な活動を希望していることを感じた。総社市の譚氏の話を聞き、今まで胸奥にあった「自分たちで何かしたい」という気持ちが一気に前面に出たように思う。今まで、外国人の支援という立場で事業を企画実施してきたが、地域に住む外国人は与えられるだけではなく、住民として主体的な活動を望んでいるということを、当事者から初めて聞いた。そのような活動をバックアップすることも大切な役割だと改めて認識した。居場所と出番が必要という JICA 東北の方の話を思い出した。
・外国人防災リーダーが、日本社会での生きにくさ、日本語がわからないために幼稚な扱いをされることなどを、総社市の外国人リーダーに力を込めて話しをしていた。日本人である私たちには言いにくいことが言える場が必要だと実感した。
・防災リーダー養成講座では、外国人講師による日本語の講義が内容的にも難しく、話のスピードも速かったため、とても良い内容にもかかわらず受講者の理解がついていけなかった。外国人講師だから外国人向けにやさしい日本語を話してくれると勝手に思い込んでいたが、事前に参加者の日本語レベルやウィスパリングでの通訳の存在を伝える必要があった。また、対面なら様子を見ての調整となるが、オンラインでは会場の様子がわからず、一方的になってしまった。多くの内容を盛りこんでいて、さらにオンライントラブルも重なり時間が押してしまった。主催者としては、もう少し時間と内容、受講者の日本語レベルなどを事前に綿密に打ち合わせをする必要があるということがわかり、今後の教訓となった。
・防災フェスタの企画ではサボテンガエルの全員が揃って AED・心肺蘇生やローリングストックを提案した。講義や映像よりも、実際に役に立つ身近な体験にウェイトを置いていると感じた。避難等よりもローリングストックをメンバーが非常に重視していたのは少し意外な感もあった。
・防災イベントや訓練の企画について、過去に実施していない新しいメニューを色々と考えていたが、

同じことを繰り返すことが重要とメンバーから言われ、気づきを得られた。 ・多文化ふれあいフェスタは、親子連れの参加を見込んで夏休みに設定したが、夏休みには帰省する人も多く、参加者がそれほど多くなかった。
（４）今後の活動・フォローアップの方針： ・活動の継続 <サボテンガエル>メンバーとの定期的なミーティングや体制づくりを行う。せっかく立ちあがったグループも気持ちの熱さを保てなければ続かない。外国人主体ではあるが、皆仕事や家庭がある中での活動であるため、無理のない範囲で主体的活動してもらうためのサポートを行っていく。 ・視察先とのフォローアップ 仙台市、総社市に視察に行ったが、両市とも現在も活動を進めている。今後もお互いのプラスになるように定期的に情報交換を続け、相互発展につなげるようフォローアップを続けたい。最初に訪問した仙台市には当事業の成果報告とその後の情報交換をオンラインで行う予定である。 ・新たなメンバーの創出 出身国や言語など多様性が広がればそこにつながる外国人住民も増えるため、さらなるメンバーの発掘を行っていく。 ・定期的なイベント 市受託事業の外国人防災訓練への参画や、多文化防災フェスタの継続など定期的な事業を行い、地域の外国人に認知定着を図る。 ・行政や地域との連携 地域の防災組織や自治会とのつながりが少しできたが、今後、社会福祉協議会や行政、そして三田市国際交流協会内の通訳部門や日本語教室と連携して、多言語支援や災害時の連絡、情報提供の体制を確立し、災害が発生したときに迅速な動きができるよう包括的支援体制を備える。 ・災害情報の整備・多言語化 災害に備え、数多くある災害関係の情報提供物から多言語化が必要なものが何かを検討し、すでにあるものは活用し、独自に必要なものは関連機関と連携して作成を進める。市独自の多言語版の防災ガイドブックや緊急カードなども作成していきたい。 ・活動の周知 より多くの外国人に活動を知ってもらうことが､すなわち防災知識の浸透にもつながると考え､様々な機会を周知につなげる。また、日頃のつながりが、災害時の情報提供や支援にも大きな意味をなすことから、SNS などでの外国人コミュニティとの連携やコミュニティに所属しない外国人とのつながり、外国人どうしのつながりを増やしていく。また、地域コミュニティへの参加を促進するきっかけづくりをしていきたい。

その他（エピソード・感想・写真など）

（１）活動中のエピソード・感想など

・養成講座に同伴で来ていた受講者の子どもたちが、企画の話し合いで中心となって活動した。その後の打ち合わせにも参加し、多文化防災フェスタでも、司会やクイズ担当として活躍した。多様な国の人、多様な年代の人が考えを出しあうことの重要さを実感した。
・養成講座で市販の災害食評価会を行ったが、リゾットやピラフ、パンが人気だった。わかめご飯などの和風はあまり好まれないようだった。
・養成講座で行った防災カードゲームは、逃げる時に持っていくものを一つだけ絵カードから選ぶというものであったが、水や下着など人によって選択がかなり違っていた。メモとペンを選んだ人がいたが、言語に不安があるから離せないという理由に納得した。
・アートに造詣のある外国人リーダーが、サボテンガエルのキャラクターを考案し、それをベースに「食」「作」「救」というふれあいフェスタのイベントの内容を表す文字のスタンプを作成し、スタンプラリーで活用した。楽しみながら活動をすることの良さを感じることができた。ボランティア活動はもちろん崇高な目標に向かって進むことも大切であるが、その中に＜楽しみ＞が必要だと思う。何に楽しみややりがいを感じるは個々で異なるが、すべての人が義務感からではなく自発的な楽しみをもって活動を進めることの大切さを知った気がした。

（２）活動の写真

仙台市視察：仙台観光国際協会のみなさんと

防災リーダー養成講座：防災イベントの企画発表

仙台市視察：災害遺構･荒浜小学校跡での語り部

防災リーダー養成講座：心肺蘇生

防災リーダー養成講座：修了証授与

京都防災センター：消火体験

さんだ多文化防災フェスタ：防災クイズ

さんだ多文化防災フェスタ：工作（新聞紙スリッパ）

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

従来より、市と連携して外国人の防災訓練や防災イベントを行ってきたが、外国人の中には防災意識が低い人も多いことを感じていた。地震や台風の経験がない人にとっては事前の備えや災害時の避難などを話してもピンとこない場合が多い。また、多言語での情報伝達をどうすればよいかも課題であった。そういった状況の中で、外国人防災リーダーの活動というものを知った。外国人支援といえば一方通行になりがちであるが、外国人自らが先頭に立って活動し、外国人目線から主体的に活動す

るこの制度にとても関心があった。しかし、予算面などで実施へ踏み出せなかったところ、この制度を別の JICA 事業で関わっていた団体より紹介を受け、応募することになった。

この事業は仙台市の視察から始まったが、そこで得た情報が原点となり、幅広い活動を展開することができた。また、最後の総社市への外国人同行での視察は外国人にも日本人スタッフにも新しい視点での見方を教えてくれた。経費のかかる視察はこの事業がなければなしえることができなかったものであり、そこで得たものの重要性を顧みると JICA 基金活用事業が果たす役割は非常に大きいといえる。

この事業で得らえた様々な経験は、当協会の他の活動でも共有していくものであり、団体としてのさらなる成長や発展にも大きくつながっていくものである。この１年間の事業を第一歩として、活動を続け、より多くの外国人や地域、行政と連携しながら、災害に備え、地域の中で外国人が安心して過ごせるまちづくりの一端を担っていきたい。